

## ✠018 パウロ Paulos

生誕：AD5（トルコ・タルスス）、死没：AD67（イタリア・ローマ）

古代ローマ帝国の属州キリキアの州都タルソス（今のトルコ中南部メルスィン県のタルスス）生まれのユダヤ人。「サウロ（Saulos）」はユダヤ名（ヘブライ語）、ギリシア語名では「パウロス（Paulos）」。  
ローマの市民権を持ち、アラム語とギリシア語を両方使える（Diaspora ユダヤ人の典型）。

『使徒行伝』によれば、パウロの職業はテント職人で生まれつきのローマ市民権保持者でもあった。ベニヤミン族のユダヤ人でもともとファリサイ派に属し、エルサレムにて高名なラビであるガマリエル 1 世（ファリサイ派の著名な学者ヒレルの孫）のもとで学んだ。パウロはそこでキリスト教徒たちと出会う。熱心なユダヤ教徒の立場から、初めはキリスト教徒を迫害する側についていた。ダマスコへの途上において、「サウロ、サウロ、なぜ、わたしを迫害するのか」と、天からの光とともにイエス・キリストの声を聞いた、その後、目が見えなくなった。アナニアというキリスト教徒が神のお告げによってサウロのために祈るとサウロの目から鱗のようなものが落ちて、目が見えるようになった。こうしてパウロ（サウロ）はキリスト教徒となった。この経験は「サウロの回心」といわれ、AD34 頃のこととされる。その後、かつてさんざん迫害していた使徒たちに受け入れられるまでに、ユダヤ人たちから何度も激しく拒絶され命を狙われたが、やがてアンティオキアを拠点として小アジア、マケドニアなどローマ帝国領内へ赴き、会堂（シナゴグ）を拠点にしながらバルナバやテモテ、マルコといった弟子や協力者と共に布教活動を行った。

特に異邦人に伝道したことが重要である。『使徒行伝』によれば 3 回の伝道旅行を行ったのち、エルサレムで捕縛され、裁判のためローマに送られた。伝承によれば皇帝ネロのとき 60 年代後半にローマで殉教したとされる。



執筆中のパウロ

ヴァランタン・ド・ブローニューもしくはニコラ・トウルニエによる 1620 年頃の作